

ブラック・ナイフ(黒い刀身)

茄子林檎柘榴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

里見蓮太郎の死闘の裏で繰り広げられていたもう1つの物語。

目次

◆人物紹介◆	1
第一夜	3
第一夜二節	5
第一夜三節	7
第一夜四節	10

◆人物紹介◆

◆人物紹介◆

主人公

プロモーター 「向日（こうじつ） 討夜（とうや）」

バラニウム製のナイフと籠手を用いてガストレアの駆逐と呪われた子どもたちの立場の改善を志し日々激しい戦いに身を投じる少年。

9歳の頃から親に追い出される形で民警に身を置いていた、その民警が無名で地元も比較的平和であるため実家にいた頃とは打って変わり極度の金欠状態を強いられるため報酬にはシビア。

初対面者の大半は彼から現金主義者のケチな世捨て人的な印象を受けるが実はとても極端な人間で助けたいと思つた人間は自分の身を犠牲にしても助けるがその反面自分と無関係の人間にはとことん無関心。しかしその性格は道化で本性は至極利己的で全てに絶望しなんなら世界の滅びを枯渇しているくらいで自分と自分の周りの人間以外皆ガストレア共々死ねばいいくらい思っている模様。

趣味といった趣味はなく強いてあげるなら読書と料理くらいで出費は専ら生活費や呪われた子どもたちへの金の工面からなっている。

日を向かえ夜を討つという名前とは対蹠的に面倒くさい労働の始まりを想起させる朝が嫌いで静かな暗闇が続く夜がすき。

「俺の無益で非生産的なこの行動の根幹にあるのは利己的なただの自己満足だ。」という謳い文句もとい決めゼリフを好んで使う。

相棒

イニシエーター 憂（ゆい）

モデル・バットの呪われた子ども。バラニウム製のハンドガンとライフルを用い向日の援護と遠距離からの攻撃を基本としたスタンスを取る薄幸の少女。

ガストレアウイルス侵食率が極めて低いためこれといった能力はバットモデルのガストレア由来の聴覚と年頃の少女に毛が生えた程度の身体能力くらいで前線に出ることはない。

物心着いた頃には親はガストレア化し討伐されていたため無償の、理

屈で説明できない何かに枯渇している様子。

自分を飼い主と同じ人間と思いつい込む飼犬のように向日のことを自分の兄と思いついで止まない、その向日も憂のことを決して嫌いではない為兄として対応してやっている。

向日との馴れ初めは民警に居候している理人（りひと）の義妹である理子（りこ）が拾ってきたことから始まる。

趣味はポエムとイラストの作成。

楽しい一日が始まるという感じのする朝がすき。らしい。

敵

厄災の襲来と神威を重ね恐れる愚者達 反技術主義者アンチ・テク
ノロジー

ガストレアの襲来によって終末論に染め上げられたとある大学生
を筆頭に組織された反技術主義集団。

ガストレアによって齎された被害を因果応報とあざけ呪われた子どもたちを神の申し子と崇め讃える危険思想を持っている、がその思想は向日の持つそれにも通じるところがあるらしく向日は一概に彼らを悪と切り捨てることはできずにいる。

第一夜

黒い体に蛍光色を走らせた巨体が腕と思われる部位を空中めがけて上げる、その黒い何かは自分の前に佇む形で立っている暗い少年めがけて腕を振り下ろす。

——ンゴシヤアツ!!!

壮絶な破壊音が交差点のど真ん中に響く。

猛攻に晒されたコンクリートの地面がクレーターを型作り砂嵐を巻き起こしている。

「……………」

黒い何かは自分の標的を広大な範囲に展開された砂嵐の中探す、キョロキョロと目を上下左右に走らせる様はまるで動物のよう。

刹那、何かの後ろから飄々とした、昼行灯な人物像を想起させる声を聞く。

「よおガストレア。てめえステージ1、2でこのパワーってことは大方パワーに富んだ動物、モデル・ゴリラってところか？」

標的の少年はガストレアと呼ばれた生物の猛攻を耐え、自分の巻き起こした砂嵐と格闘している間に、その短時間に後ろに回っていたのだ。

「んで、ゴリラにはバナナってところか。くれてやるよ俺のとびつきりのバナナ。産直だぜ」

言うど、少年は懐から取り出した三日月型の黒い刀身を持ったナイフを構え、眼前にやりガストレアを睨みつける。

戦いに巻き込まれた傍観者達は皆車の中、はたまた店の中から息を飲み少年を見守っている。

「……………」

ガストレアは相変わらず動かず、何も言わない、振るい立てられた感情からか肩が上下しているのを除いて、何も動かない。

「——」

少年が何か言ったのを皮切りにガストレアは両腕を大きく開き胸をドラムの要領でバンバン叩く。威嚇の意だ。

少年もまたナイフを掲げ、走り出す。お互いに暫定最大威力の攻撃手段を選択するため、決着は一瞬でつくはずと思われたが。

刹那、パシユンと気の抜けるような音がしたかと思っただらゴリラ型のガストレアは背中にあたる部分から凄じい勢いで体液を噴出させる。それでも負けじと突撃する為の姿勢を整えようとするが。

バババババババと凄まじい銃撃音が郊外に鳴り響く。とガストレアは全身から多量の体液を漏らしながら地面に倒れ伏す。少年は一応、死を確認するためにガストレアの頭を足蹴にする。が、反応は全くない。

ガストレアの死を見届けた少年は音の出处、自分の前を見る。

「おにい、討夜さん。遅いから心配したら案の定…交戦でしたか。」

黒い髪を肩まで伸ばした薄幸で線の細い、それこそ撫でたら折れそうな脆弱少女が大きな灼眼をパチパチとさせている。

「…ああ、スーパールの帰りにちょうど、な。でも内心助かったところもあるな。今月厳しかったからよ、民警とイニシエーターにとって平和ってのは必ずしも良いとは言えねえわな。」

彼らは人の悲劇、不幸でもって成立している。

開始因子（イニシエーター）と加速因子（プロモーター）だ。

第一夜二節

「それで、本分の方の収穫はあったんですか？」

憂という名の薄幸少女が下から向日に向けて疑問を投げかける。

「ああ！鶏胸肉と卵！貴重なタンパク源を格安で手に入れたぞ！肉は冷凍すれば実質消費期限ないしこれでしばらく調味料かけご飯生活とはお別れだぜ！今夜は豪勢に親子丼でも決め込むか？」

向日は腰をかがめ一回りも二回りも小さい憂に視線を合わせ結論を伝える。中身のパンパンに詰まりタマゴのパックと長ネギが顔を出しているレジ袋という勝利の証を掲げながら。

傍観者達は唐突な事態の収束とその当事者らののほほんとした雰囲気に啞然としている様子。

刹那、向日の携帯電話からガストレアを批判し糾弾する内容のヒツプポップが流れてくる。向日は携帯電話の通話アイコンをドラッグし通話要請を受け取る。

「あーもしもし？社長か？ちようどいいや今さつきデカブツ仕留めたとこなんだけどよ…なに？今すぐ事務所に帰ってこいだ？あーわーったよ話は…あとでいいな」

向日は報告しかけて社長と呼ばれる人間に遮られる。

どうやら事務所側で何かあったらしく向日にコールがかけられたのだ。

「てことで帰るぞ憂。そのマシンガン重いだろ持ってやるよ、ほら。」

向日は携帯電話を再びポケットにしまうと。憂の肩から銃の入ったギターケースを半ば強引に奪い取ると早歩きで東の方向に向かって行った。先程から相変わらず啞然としている傍観者達を置いて。

七里民警事務所

「で、なんなんだ七美社長、重要な話って。」

向日はサンダルに履き替えながら疑問を投げかける。

「東京エリアの有数の大権力者様からメールづつで収集命令よ。今すぐ私とあなたと憂ちゃんですら38区のカストレア対策本部まで行くの

よ。ほら部屋着になんか着替えてないで。」

七美社長、と呼ばれた中学生くらいの白いカチューシャと白い肌が特徴的な少女はその権利者が自分達に収集をかけてきたので今すぐ向かうぞという旨を半ば怒り口調で書きなぐるように向日に伝える。

「は？マジかよめんどくせえな俺ぜったい行かなきゃダメなの？モニター越しじゃダメなのでせうか？電話でいったように俺も憂とゴリラ型のガストレアと戦って疲れてんだけど。ねえ疲れたよ。」

「ダメに決まってるでしょーが！統治者のあの口ぶりからして即時仕事入るわよ。どの道動くのならついでに話聞いてから現場に行つた方が効率的よ。それにこの任務で功績を出せばたんまりお金入ってもやしの入っていない牛肉の本物すき焼きが食べられるはずよ！もう少し頑張つてねフレーフレー討夜。」

七美は机の上の筒型のペンケースにボールペンに混じって入っていた小さな旗をパタパタ言わせながら向日の仕事への熱意を煽て促す。

「しゃーねーな。アイツの命令無視して序列剥奪とかなつたらそれこそ困るしな。」

向日は頭をポリポリ搔くと一つ大きなため息をして。先程脱いで選択籠に投げ捨てたよそ行きの綺麗なジャージと着古され色のかなり淡泊になつたデニムパンツに袖を通す。

第一夜 三節

東京エリア38区の対策本部、いやな思い出がある。

俺は養子だ、本当の優秀な弟と区別され、気付いたら圧倒的は差をつけられ……

その悔しさと愛情への枯渇を原動力に頑張ったけど、それでもアイツには……

やがて俺は騒動に乗じ向日家と同じルーツを持つ言わば親戚みたいな関係の少女が一人で運営している民警に飛ばされた、しかしそれは拒否する余地が残されていた以上は自分の意思で選んだ選択、内心あの家から逃げ出したかったのだ。

東京エリアの郊外38区の内地に位置する対策本部、その構造はシンプルでそれでいて機能に適ったビジュアルだ。人はその構造にサイバルナイフのような機能美を想起させる。

真っ白な絵の具のパレットみたいな壁は陽の光を反射し白い光沢を放っている。

その対策本部の最上階に位置する階層、弟の自室に向日とその連れは立っていた。

「あーあ、出会っちゃったな。」

髪をクシャクシャしながら眼前に真っ白なブレザーのような礼服に身を包んで立っている弟を見やる。

弟は向日よりも年下なのに身長が176cmと高い。遺伝のせいだろうか、その為同じ姿勢で見下すという形になるのだ。

「兄さん、もう、やめませんか。そういうの父ももういません。無理に反抗期を演じる必要性はないんでさよ。」

東京エリアの大金持ちの一人息子。向日 総司。

ガストレアが攻めてくるずっと前から埼玉に大きな屋敷を構えていた大富豪の一族の頂点に立つ、討夜の弟だ。

「ツチ……いちいちイラつく野郎だなお前は、俺のこの口調や性質は根付いちまったもんなんだよ。俺の素なんだ。」

「もう！二人とも会えなかった分の確執の埋め合わせなんかしなくて

いいから！早く本題に入りましょう！」

七美が仲介に入る。心無しか焦っているように思える。向日の性質上、ヒートアップすると大権力者である総司を殴りかねないからだ、もしそんなことになったら、どうなるかわからない。

「…はい。向日家の権限でもって兄さんを呼び出したのは他の誰でもないこの僕なのですから。交渉を円滑に進めたいというのは当たり前前の欲求ですからね。」

「交渉…？」

向日はあん？という態度を取りながら総司の言葉の1部を汲み取る。

「ええ、交渉です。俗世に疎い兄さんでも知られていることかと思いますが。昨今は元埼玉辺りの外周区を中心にガストレアを肯定しているカルト教団がプロモーターを殺害しイニシエーターを誘拐する、といった活動をしているんです。」

「で？」

ニコニコした顔で事情を伝える総司に向けてガンを飛ばしながら一言決め込む。

「ですから。兄さんとイニシエーターの女の子でそのテロリスト集団に偵察、端的に言えばスパイ活動をしてもらいたいです。」

「ふーん民警つてのは随分と都合のいい職業なんだな。俺は統治者様のメイド執事なんですなハイ。で報酬はいくらデスカ？」

すっかり舐めきった口調で鉄のような固い笑顔を崩さない弟、総司に詰め寄る。その様を見ている七美はポカンとした顔で魂の抜けたような感じで地面にピタリと太ももを落としている。

目の前の粗野で野蛮な不良崩れは天下の統治者にこんな無礼な口を聞いているのだから。それは当然の反応である。

「うーん、東京エリアの38区、ここら一带は比較的落ち着いててあまりプロモーターに仕事を頼むことは無いので相場と言うのが分かりません。そうだ、結果に準じた報酬をしんぜよう。と言うのはどうでしょう。」

手をポンと叩きながら一言、総司のこういう肝心なところが抜けて

いる点は昔から何一つ変わらない、それに対し向日は燃える目を向け一言。

「その組織潰してやる。って言ったらいくらまで出せる？」

第一夜 四節

向日はガストレアの存在を肯定し呪われた子ども達をプロモーターから奪取、保護している危険思想のカルト集団の戦闘能力を削ぐ為のスパイ活動を義弟にして東京エリアの大権力者である向日 総司に依頼されていた。

しかし、向日は恒例の反抗癖で総司の依頼を受けるが自ずと「徹底的な撃破」をする旨を表明しそれに準じた報酬を貰わんとしていた。

年齢にして高校生になったばかりの彼はそんな自分の行動の根幹にあるのは義弟へのコンプレックスの払拭、己の能力の証明つまるところ一種の愛情表現の叫びだとはまるで気付かなかった。

「ふう〜、一回ボロボロに壊滅した日本にまだこんな綺麗な場所があるなんてな。」

向日は碧のカーテンがさざめく山で大きく深呼吸をする。

「全く、なんであんたは保証のないことを声高に宣言さるのよ。私まで巻き添えで死んだらどーするのよ?」

言っているのは先程の先程の会話にて身に付けていた華美な令嬢風の装いとは打って変わってショートパンツと白のカットソー、運動に適した服装だ。

「とか言いながら着いてきてくれるのが七美さんの好きなどこなのよん。バリツンデレポイント高め!俺歓喜カンゲキコンゴトモヨロシク!!」

言うと思春期真っ盛り可愛い女の子大好き少年はツンツン少女のバックに周り右に左へヤンヤンヤンという様子。

「同じようなこと何人にも言ってるからか言葉の効果が薄くなってるわよ、まるで響かないから。」

七美はそんな彼を軽く肘打ちし3mほど吹き飛ばすとむすん、として行ってしまった。

「ふぐう…可愛いものは可愛いだろうが!」

なんて誰の耳にも届かない文句を呟くように吐き捨てる。

イニシエーターの少女はそんな光景を量の細く白い手で口を塞ぎ

ながら傍観している。

「それにしても、ほんとにこんな山奥にカルト集団いるんでせうかねーこんなん行き来だけで一苦勞じゃねえかよーって向日くんの懷疑タイム」

「そう、こんな山を超えて人の足ならとんだ苦勞ね。けどガストレアウイルスの保菌者なら？伏せて」

言つて――

三人の上を幾十という数の人影が // 飛躍 // する。

「な――」

ガストレアウイルスを保菌し限定的な範囲で御する少女達は感染源のガストレアの身体的特徴を継承し行使する。

ならば、あれらは全て飛躍能力の持ったガストレアウイルス保菌者ということだ、集団はそれだけの子どもたちを既に所持している。

「飛躍」の性質を持っている者だけであれだけ、またはそれ以上はいるということだ向日は顔を驚愕の色に染める。

「こんなの…ふざけてる。」

岩陰に隠れ音を殺しながらしかし確かに向日は声を零した。

しかし、その言葉は依頼の受託を後悔するものではない。

瞳から光の消えた少女達を強引に馬のように扱っている人間達に対する怒りのそれであつた。

少年はおそらく最後の一組と思われる少女の飛躍を見届けるとそのシルエツトに向けナイフを投擲し従者に突き刺した。

痛みと突然の事で慌てふためく男はバランスを崩し少女から落ちる。

向日はその男に近づいて行く、自然に溶け込むかのようにフラフラと揺れながら、少しでも仲間を収集されるリスクを回避する為だ。

けど確かに一歩一歩は怒りの色を帯びていた。

「よお、おっさん。場所案内頼むわ、拒否したら次はその汚ねえ首にナイフ差し込んで殺すよ。」

そう言つた少年の両の眼にはどこまで黒く光の映らない漆黒に染まっていた。